会員便り

六郷満山峰入の一資料

坂本与市
後藤正二

大分県教育委員会は、昭和五十四～六年度の三ケ年間、「歴史の道」の調査を実施した。その成果は、橋本操六『伊予街道』、佐藤満洋『肥後街道』、豊田寛三・加藤泰信・末広利人・泰政博『日向道』、橋本操六『放生会道』、末広利人『勅使街道』、伊藤勇人『行幸会道』、大隅順公・加藤泰信・小泊立矢『峰入りの道』、泰政博・楢本譲司『永山布政所路Ⅰ豊後高松――日田』、豊田寛三・佐藤満洋『永山布政所路Ⅱ四日市――日田』、伊藤勇人『奈多行幸会道』の十冊にまとめられている。従来、この種の調査がほとんどなされていないので、成果が注目されている所である。その他の道の調査も、後年の第二次計画で進められる予定である。

これらの成果の刊行物の内、『峰入りの道』の七ページ昭和三十四年に実施せられた峰入り道順路が、次のとおり示されている。

初日（二三日）

。本山末寺・胎蔵寺（豊後高田市、田染）→。本山本寺・伝乗寺（豊後高田市、田染）→。本山末寺・岩瀧寺（豊後高田市、田染）→。本山末寺・富貴寺（豊後高田市、田染）→。本山本寺・報恩寺（豊後高田市、来縄）→。本山本寺・智恩寺（豊後高田市、鼎）→。中山本寺・長安寺（豊後高田市、都甲）……宿泊

二日目（二四日）

。長安寺→。中山本寺・天念寺（豊後高田市、都甲）→。中山本寺・無動寺（西国東郡真玉町）→。中山本寺・応暦寺（西国東郡真玉町）→。中山末寺・弥勒寺（西国東郡真玉町）→。元六郷山末・壽福寺（西国東郡真玉町）→。末山本寺・霊仙寺（西国東郡香々地町）→。末山本寺・清浄光寺（東国東郡国見町）→。中山本寺・千燈寺（東国東郡国見町）……宿泊

三日目（二五日）

。千燈寺→。千燈寺五辻岩屋→。元六郷山末・胎蔵寺（東国東郡国見町）→。末山本寺・岩戸寺（東国東郡国東町）→。天台宗・長慶寺（東国東郡国東町）→。末山本寺・文殊仙寺（東国東郡国東町）→。末山本寺・成仏寺（東国東郡国東町）→。末山本寺・神宮寺（東国東郡国東町）→。末山本寺・行入寺（東国東郡国東町）→。天台宗・興導寺（東国東郡国東町）……宿泊

四日目（二六日）

。興導寺→。末山本寺・宝命寺（東国東郡武蔵町）→。三井寺（東国東郡武蔵町）→。末山本寺・報恩寺（東国東郡武蔵町）→。中山末寺・丸小野寺（東国東郡武蔵町）→。末山本寺・瑠璃光寺（東国東郡安岐町）→。中山本寺・両子寺……宿泊

五日目（二七日）

。両子寺→。両子山権現→。両子山頂……結願

これに対し坂本与市は、峰入に許されて参加した熊本県山鹿市栄町二五八の堀若男氏の手記「六郷満山修験道 峰入り行事に参加の記」を基に、報恩寺（豊後高田市）・智恩寺（同上）・弥勒寺（真玉町）・寿福寺（同上）・清浄光寺（国見町）・胎蔵寺（同上）には立ち寄っていないことを主張するとともに、後世のために右刊行物の正誤表を関係者に配布することを、県教育委員会に強く要望した。「六郷満山修験道 峰入り行事に参加の記」は、堀若男氏が直後にまとめたものである事は、坂本与市あて郵送の手紙の消印が、昭和三十四年四月十五日の山鹿局であることである。手記は市販の西洋紙九枚に青インクで刷られている。横書きのガリバン刷りである、

これを後藤が次の作業を経てまとめたものが、次に紹介する手記である。手記を読み易くするために点を増やした。地名・人名、その他の誤記は正した。一部の漢字を仮名に、逆に仮名を漢字に改めた。六郷満山の歴史・文化・信仰等の研究者の参考になれば幸である。

六郷満山修験道（大分県国東半島）峰入り行事に参加の記

昭和三四年三月二二日～二八日　堀　若男（六五才）

健康コース七日の旅（地図＝宇佐、豊後杵築、豊岡、鶴川）

六郷満山会に深甚なる謝意を表します。

二二日　朝六時三十分山鹿駅発バスに乗る。風雨強し。坊中にて阿蘇登山者ゴッソリ下車す。大分駅にて市内の地図を求む。立石駅着午後三時四分。四時五十五分発バスにて平野に五時三十五分下車し、ここより胎蔵寺の部落に帰る母嫁の方と道連れとなる。熊野権現祈禱所の標柱あり。胎蔵寺である。六時三十分。本堂に詣でる。石刷の「伝教」の額あり。天台宗なることを知る。庫裡には既に行者の方々等先着もあり。寺田豪延法印の心安げな応待にいと心地よし。大先達千燈寺今熊豪正法印その他の行者御一同に引合せある。大発起寺田法印より入峰に付てのお話を聞く。行き届いた手配に感服す

る。一同夕食の膳を共に雑談に興じ散会。我等同宿五人は、総代の後藤国人氏宅のぜいをつくしたお座敷に。お話を伺いながら夜更くるまで話し込み、十一時過ぎに床についた。

二三日　六時起床。今日は待望の入峰の第一日である。胎蔵寺に勢揃いされた行者二十名、信者として特別の許可のあった我等三名は、大先達を先導として、寺に続く自然石の石段にかゝる、九時三十五分。鬼が一夜にして築いたというこの石段を上り詰めた所に、本殿、稚児落しや洞窟がある。少し下った広場には、もう採灯大護摩の祭壇がしつらえられて、皆の集まりを待っているようである。見上げるまでもなく厳然と、しかも厳粛なうちに柔和な磨崖仏二体、即ち大日如来と不動明王の御像とを、その半裸の坐像のまゝ拝することが出来て、自然に会釈せずにはおられない。身心に響くものある磨崖仏像に九拝する、十時。寺田法印の司会にて開式。松岡実民俗会長の六郷満山のお話。今熊法印の願文の朗読、祝辞・祝電の披露に次ぎ、御弓師の儀終って点火師により点火された、十時五十分。採灯大護摩の核心に触れるのである。菩薩のように見える行者の方々、一般信者は満山に充ち、法螺の音は満山にこだまし、鐘の音に和して読経。いよいよ高らかに祭壇の火焔また四辺をおおう。為に石仏こげんばかり。火焔の中に不動明王を見る。この間にありて大先達は腰刀を抜き、薪輪を切り、もえ盛る火焔に投げ入る。護摩を願う善男善女の木札符一枚一枚、家内安全、国家安泰、家業繁昌、五穀豊穣は大先達の高唱により投げこまれる。この間にラジオ、テレビ、新聞社等の報道陣の活躍は、殊に目覚めるようであった。採灯護摩の残火を囲む信者をあとに、十一時二十分差定の式全く終り、法螺の音の余韻嫋嫋たる中を下山する。磨崖仏ともお別れである。正午、寺にて行者の方々、我等五人となる。それに報道陣の方々と立食を共にし、胎蔵寺をあとに下山する。平野十二時四十分。随願寺十二時四十五分。真木大堂（伝乗寺）木像三体重文。御接待を受くる。十二時五十分から一時五分。田染局一時二十五分。岩脇寺一時五十分から二時十分、祈禱あり。局よりの間まで、二時三十五分。山道にかゝる、二時四十五分。鹿を望見する。二時四十八分寺田法印が鹿だ鹿だと叫ぶ。真向いの山を鹿が見えかくれに走っているのが見えた。法螺の音に飛び出したのだろう。岩飛び二時五十二分。錫杖を持ち次々に岩を飛ぶ行者の雄姿を見る。富貴大堂三時三十分から四時十分。国宝である。内陣

の四本丸木柱に、欄間の四面に、如来の木像の後の板壁に、色あせたれどことごとく仏画を配し、浮彫のようである。この辺を蕗という。富貴は蕗に通ずるとのこと。峠五時。新城五時二十分。加礼川五時三十分。峠六時。かくて屋山の長安寺についたのが六時十五分。夕食後八時三十分より大分放送局の上野満さん一行が録音をとられたので、その末席に列す。西日本テレビ、大分合同新聞社、それに部落の信者の方々を交えての座談会があった。仏像三体は重文である。産屋の風習は珍らしかった。

二四日　長安寺を発つ、七時四十五分。峰を上り下りして。川中不動で岩飛びあり、八時十分。天念寺八時十五分。仏像六体はやはり重文である。毎年一月七日に大タイマツ（二間位）の行事がある。八時三十分発。身滌（みそそぎ）神社の前で行者をビンビン（肩車）で運ぶ行事がある、八時五十分。岩屋八時五十五分。香水の舞の行事がある、九時十分。針耳岩に九時三十分。鉄の鎖が二間位垂れ下っている。上る自信がない。しかし後もどりは御法度である。ピッケルとサブザックを今石さんに持ってもらい、押し上げてもらう。やっと上れば又鎖。今度は木の梯子段に鎖で少し安心する。上ってみれば断崖絶壁。針の耳穴。引くもさがるも出来ない。進退ここに極まれりという難所である。ここが難行苦行であろう。しかたがない。二間位の鎖を握って下りる。右すれば、この度の第一の難所。無明の橋に至る。岩頭。とても右する勇気はない。左をとる。左といっても岩をくりぬいた絶壁をやっと通れる程のデコボコの岩路十メートル位が断崖に添っている。もうこゝでふるえていては渡れない。奇妙に落ち着いてきて渡る。今石さんが念仏を唱えていられたのに気付く。それからの上りの鎖は楽であった。峠である。無明橋の行者の方々は、今しも向うの岩を下りかゝっていられた。無動寺十時。十時五分山に入る。応暦寺十一時十分。お接待の昼食を受け十二時十分発。雨となる。夷行場一時二十五分。霊仙寺でお接待を受く。一時五十分。実相院でお接待を受く。隣り合せのお寺で、壇家も上下各々五十戸くらい仲よく配分されておるとのゆたかな話。六本杉二時二十五分である。三時十分休憩。赤根四時五分。千灯寺に着いたのは五時十五分。今熊大先達のお寺である。スピーカーが一行の到着を流している。今熊法印のお父上はじめ有志家の出迎え。それに新たに報道陣も加わる。俗論に悩む事なく体当りの長岩屋行場の疲れの果ての

清朗さ。句あり。

本堂に疲れ座するや桜花　もしを（若男）

二五日　七時三十分千灯寺出発。道すがら矢野主事のお宅に寄る。昔六郷満山とのゆかりある家柄にして、行者を接待せられしおわん、すり鉢（変形）、机、護符等の貴重品が保存され、当時を偲ぶ。これより峰にかゝる。千灯寺の奥の院の旧跡、八時七分。昔は三ケ寺あったとの事である。岩不動八時三十分。下りきった谷川にマツゴの水を法螺貝より抜いたのが九時五分。岐部岩の峠九時七分。六所大権現九時四十分ここの国東塔は代表的なものである。岩飛びの行事をNHK福岡テレビが撮影した。五辻不動なり。石立山岩戸寺九時五十五分。お接待を受け十時三十分発。長慶寺十時五十五分。由緒の掛軸あり。お接待あり、十一時五分発。途中池普請の地づき音頭を見る、十一時五十五分。上溝利光氏宅（岩戸寺四一九）は昔行者の休憩所であった。お産の時は本家を離れた一段下の産屋に七日間こもり、谷川で身を浄めてから本家に帰る風習は、今も守られているとの話であった。文殊仙寺着十二時三十七分。昼食後、寺の背後の行場に行者とテレビ局員が登られたのを、かすかに仰ぎ見る事が出来た。一時三十分発。お接待に腹がもたれる。地蔵峠に一時四十分着。成仏寺二時から二時四十分。お接待あり。かげ山峠三時二十分から三時四十分。四国見ゆ。大岳山神宮寺、三時五十分から四時十五分。行入寺、四時四十分。五時四十五分発のバスにて夕暗迫る潮の香の国東町に入る。六時四十分、興導寺の人となる。寺は念仏空也上人の開基なるも、今は天台宗なり。座談会を終って町家の風呂に案内され、寺で特配の毛布にぬく〳〵と床についたのは、十一時を回った頃であった。

二六日　興導寺発六時三十分。国東の町からバスに乗り、海岸線のアカハゲに下り、七時四十分。宝命寺、八時から八時十五分。菜の花ゆらぐ畦を。三井寺、八時四十七分から八時五十五分。ここでも国東塔が存置せられている。報恩寺（竹中氏）十時十分から十時四十分。丸小野寺、十一時三十五分から十二時四十五分。昼食。かん虫除けの行事あり。松ケ迫峠、一時五分。

春風に押し上げられて峰に入る　もしを（若男）

峰の一本松、一時二十五分から一時四十三分。両子寺を指呼の間に見る。こゝより両子寺の配領である。総代の矢野千年氏宅、二時五十分。メノーは珍らしかった。小畑、三時十分

等身大の聖観音木像、三時二十分。渡辺政美氏宅の庭の一隅に仁聞菩薩の手や足を洗われたという石水盤のいわれを聞く岩渕四時九分のバスに乗り、杉山で四時三十分下車。瑠璃光寺、四時四十三分から五時三十分まで。カヤの木像三体、向って左から釈迦、薬師、阿弥陀。慶長十八年三月の庭訓往来（上）や御成敗式目を見る。県のトラックに乗る、五時五十五分。六時五十五分下車、両子寺の山門にかゝる。道暗くして豪壮の気にうたる。本堂着、七時十五分。山気身に泌む。一同わらじをぬぎ本堂に額づく。座談会に自己紹介あり。

（以下略）

二七日　両子寺発九時。水呑場、九時五十分。峠十時二十分両子山頂の三角点七二〇・八メートル。十時二十五分着。山頂よりの眺望は、六郷満山の文化と相俟って国立公園に相応しい大パノラマである。姫島、四国、佐田岬半島の景観は素晴らしい。十時四十分下山。十一時、両子寺着。十一時四十分より峰入行事終了の儀式に移る。「百六年を隔て、こゝに無事に六郷満山の峰入行事を取り済まし得たる歓喜」に、採灯護摩供養の大行事は終った。大発起寺田豪延法印、大先達今熊豪正法印、他各寺御住職の諸師、松岡・上野正副民俗会長、それに信者として特に許されて行を共にした岩本さん、今石さん、生木さん各位に、また応援の所在の方々に感謝する次第である。時に十二時四十五分。

（中　略）

〔六郷満山峰入り行事関係記録〕

（中　略）

3　採灯護摩壇に貼出された次第書

入峯第一日胎蔵寺のもの

差　定	
千灯寺豪正	採灯師
文殊仙寺文雄	始経師
岩脇寺賢静	
成仏寺俊亮	法螺師
千灯寺徒弟豪真	
長安寺光尋	
富貴寺順侃	法弓師
実相院聖覚	
行入寺文道	助木師
霊仙寺良安	

最後第五日両子寺のもの

採灯護摩供養差定	
同上	
同上	
同上	
同上	
応暦寺順公	
行入寺文道	
実相院聖覚	

岩脇寺祐照　　胎蔵寺順証
興導寺徒弟児弥　　霊仙寺光導
　　興導寺豪照
富貴寺順侃　　富貴寺順侃
成仏寺俊亮　　点火師　　岩戸寺祐照
興導寺豪応　　会奉行　　興導寺豪照
長慶寺豪光　　会行事　　同上
胎蔵寺順証
両子寺豪延　　受付
応暦寺順公

4　祈禱行事のいろいろ

(1)　健康・無病息災

ゴザなどの上に子供をあおむけに寝かせ、行者が一人一人の間を呪経を唱えつゝ、錫杖　または珠数にて子供の頭をなでる。

(2)　ビンビンの行事

先達を除く行者一人一人を若者が肩車にて、次の行場まで運ぶ。

(3)　カン虫封じ

行者が子供の掌に呪経を唱えつゝ、梵字を墨書きする

(4)　岩飛びの荒行

(5)　香水の舞

三尺位の木を二段にへがし、二人一組にて、ぢがたの音頭につれて舞う。古式ゆたかなり（東国東では信者も西国東はお寺さん）。

(6)　火護摩

一間四方位の高さに木柱を組み、その中に青松葉、松葉等を一間位積み重ねて点火し、火焔の中に一家安全等の木札を投げ入れる。

（中　略）

6

証明書

六郷満山入峰行者
熊本県
氏名　堀　若男
国東半島
満　山　会　㊞

（入峯に先立ち交付された）

六郷満山入峰履修之証

熊本県　堀　若男

今般復興第一回六郷満山仁聞大菩薩古跡入峰行に随喜同行し霊跡を尋ね浄業を積まれし事を証す

一　期日　自昭和三十四年三月廿三日
　　至　同　年三月廿七日

一　大先達法印千灯寺豪正
一　大越家法印両子寺豪延

昭和三十四年三月廿七日
天台宗六郷満山会　㊞

（下　略）

坂本与市（大田村文化財調査員・大田村永松）
後藤正二（県文化課文化財専門員・大分市南太平寺五の一）

会　報（投稿規定）

一　本誌への投稿は会員を原則とする。ただし右以外でも、優秀な研究・特別の事情あるもの等については、編集委員会で特別に審議する。
二　一人の投稿枚数四〇枚以内。
三　原稿用紙は四〇〇字詰を使用すること。
四　文字は楷書、原則として当用漢字・現代仮名づかいとする。やむを得ないものは致し方ないが、最小限に止めること。
五　点（、）、マル（。）、並列点（・＝ナカグロ）、「」などはっきりつけ、必ず一字分下げとすること。
六　写真・凸版は仕上り一頁大（一六センチ×一〇センチ＝一六〇平方センチ）までは、一論文について会負担とするしたがって、写真凸版には、仕上りの寸法（センチ）を記入するのが望ましい。写真は鮮明なものに限る。図版の浄書を要するものは浄書代金は本人負担とする。
　右の写真、凸版の枚数（坪数）は、依頼原稿の場合に限り、編集会議で審議し、別途考慮する。
七　執筆者は、文末に現職、現住所を明記し、読者から連絡しやすいようにする。
八　校正について
　(イ)　執筆者の校正は、原則として初校一回とする。校正は可及的速かに、速達で返送すること。
　(ロ)　途中において、原稿の追加・書きかえをしないこと。
　(ハ)　校正は二校～三校を限度とし、編集責任者が行なう。
九　原稿内容
　論文のほか、書評・紹介・調査・見学記・会員通信・随想感想・教育実践記録・時評等々の原稿も歓迎する。